



# 全日本剣道連盟居合（解説）

## 全日本剣道連盟

# 目次

序	1
全剣連居合道制定に当たって……………	1
全日本剣道連盟居合（解説）の改正趣旨……………	3
解説書の主な改正点と解説の要領……………	4
全日本剣道連盟居合（解説）二本追加の趣旨……………	5
一、作法……………	6
（一）携刀姿勢……………	6
（二）出場……………	6
（三）神座への礼……………	7
（四）演武の方向……………	7
（五）始めの刀礼……………	7
（六）帯刀……………	9

(七) 終わりの刀礼……………10

(八) 退場……………12

二、術技……………12

〔正座の部〕

(一) 一本目「前」……………12

(二) 二本目「後ろ」……………15

(三) 三本目「受け流し」……………16

〔居合膝の部〕

(四) 四本目「柄当て」……………18

〔立ち居合の部〕

(五) 五本目「袈裟切り」……………20

(六) 六本目「諸手突き」……………21

(七) 七本目「三方切り」……………23

(八) 八本目「顔面当て」……………24

三、補足

(九)	九本目「添え手突き」	25
(十)	十本目「四方切り」	27
(十一)	十一本目「総切り」	29
(十二)	十二本目「抜き打ち」	31
	補足	32
(一)	神殿内での出場・退場における足の運び方・回り方	32
(二)	神殿内における神座への礼	32
(三)	相互の座礼	33
(四)	野外での刀礼	33
(五)	提げ刀姿勢	33
(六)	演武の心得	34
(七)	呼吸	34
(八)	柄の握り方	34
(九)	下げ緒	34



# 追記

○ 神殿内での出場・退場における足の運び方・回り方 (図解)	35
○ 全日本剣道連盟居合審判・審査上の着眼点	36
○ 日本刀および拵の各部名称 (図解)	39
追記	41

## 序

### 全剣連居合道制定に当たって

剣道と居合道とは極めて密接な関係がある。居合における抜刀や納刀は勿論、刃筋気魄その他手の内などは、剣道人としても参考となることが多いと思う。よく世人は「あなたは居合もやりますか」と問う。「やらぬ」といえばその人は不思議そうな顔をするであらうし、問われた本人も内心いささか面はゆい感がするにちがいない。それ程普通の人々は剣道と居合とは一本のもので剣道人は当然居合を知っていると思っっているようである。また真剣をもって居合を試みるならば、このごろときどき耳にする「近頃の剣道は竹刀剣道だ」というような非難もうすらいでくるのではあるまいか、しかし居合にはいろいろな流派があり、それぞれの本数も多い、従ってその道へ入るとしても一々それをきわめることはむずかしく、また時間的にも問題がある。そこで居合道の基本的なもの、技（わざ）としても各派の基本的なものを抜きだし、これを総合して、いやしくも剣道人ならば、少なくともこの程度のことは知っている、そして抜くことができるというようにすることは本人にとってもまた居合の普及の面からも好ましいと考えられるわけである。

この見地からずうつと以前に、その試みが全剣連でももたれたことがあったが、幸いにこのたびは急速に進展して、「まずこれならよい」という案ができ上がり、それを昭和四十三年の京都大会で披露するまでに至ったことは誠に同慶の至りである。私は剣道をやる人なら少なくともこれくらいは心得られたいものと希っている。

全剣連居合道形の研究制定に当られた先生方のお話では、基本的なもの（技）は八、九分どおりそれに網羅されているとのことです。入門としては充分と思うが、居合道はこれに尽きるものではなく、その技および応用は多岐に亘り、また奥深い精神的な面もあると思うので、多少とも居合道を窮めようとされる者は、この形にとどまることなく古来の流派も併せて研修されることが必要と思う。

昭和四十四年五月

全日本剣道連盟

理事長 大谷 一雄

## 全日本剣道連盟居合（解説）の改正趣旨

これまでの「全日本剣道連盟居合（解説）」は、先人の苦心を結集して昭和四十四年に制定したものである。以来、昭和五十一年に一部改正、昭和五十五年に三本を追加し、広く全国で実施されてきて今や世界各国でも修練されるようになり、その解説書の外国語への翻訳も要請されるようになってきた。

しかしその解説書には、明らかな誤植があったり、用語・かなづかいなどの表記法の問題や不統一、あるいは文章の構成や表現の難解さ、などのことから翻訳や修練の障害の一つになっている、という指摘もなされてきた。

このような観点から、全日本剣道連盟居合道委員会はその研究・検討に基づいて通達・講習会などを行って補足してきた。今回の解説書改正は、現行解説書の精神を可能な限り尊重しつつ、解説書をやさしい構成と文体に書き改めてわかりやすくするとともに、申し合わせ事項、審判・審査上の着眼点、現在まで実施してきた具体的方法などを整理統合して全日本剣道連盟の統一見解として改正を行った。この解説書が居合道の正しい普及・発展と修練に役立つことを期待するものである。

昭和六十三年九月十七日

財団法人 全日本剣道連盟

専務理事 武 安 義 光

## 解説書の主な改正点と解説の要領

- 一、解説は現代文表記法に従い、外国語への翻訳、独習の便を考えて表現を具体的にし、平易な文体とした。
- 二、専門用語はそのまま使用して常用漢字以外にはふりがなをつけ、同一動作は同一用語で表現した。
- 三、剣道用語と違和感のないように用語を改めた。
- 四、演武するときの動作順序にしたがって「作法」、「術技」を解説し、その他の事項を「補足」とし、全体を三部構成にしてわかりやすく整理統合した。
- 五、作法は居合道委員会の申し合わせ事項（昭和六十一年九月）を採用し、従来のものは「補足」で解説した。
- 六、下げ緒を着用することにした。
- 七、術技における「意義」を「要義」（肝要な筋道）と改め、簡潔に表記した。
- 八、方向表記の基準を「演武時の正面」に統一した。
- 九、それぞれの技について、表現を整理統合し、若干の補足・修正を加えた。

## 全日本剣道連盟居合（解説） 二本追加の趣旨

現在の全剣連居合は、昭和四十四年に制定されてから三十年を経過し、居合道の発展と普及に成果を挙げてきた。

世紀の変わり目にあたり、さらに全剣連居合の内容の充実を図り、より多くの人々が居合道に親しむようにするため、実施し易い技二本の追加を行うことにした。

さて、今後居合道の向上を図るためには、剣の理法に基づき、心気力一致を目指し、呼吸のしかたや手の内の修練を重ねること、特に刀の操法に習熟することが必要である。

さらに、居合道が剣道を修業する人にも愛されるようになり、剣居一体の実を挙げることが望まれる。

今後、全剣連居合が剣道、居合道を修練する人達に、ますます普及することを念願するものである。

平成十二年十一月二日

財団法人 全日本剣道連盟

会長 武安義光

# 一、作法

神前（道場）で演武するときには次の作法にしたがって行う。仏前、国旗、来賓席はこれに準ずる。

〔一〕携刀姿勢〔二〕出場し、〔三〕神座への礼を行う。〔四〕演武の方向に位置し、〔五〕始めの刀礼を行って〔六〕帯刀し、演武に移る。演武を終え、〔七〕終わりの刀礼を行い、ふたたび「神座への礼」を行って〔八〕退場する。

## （一）携刀姿勢

左手は親指を鐙つばにかけて残り四指で下げ緒とともに鯉口近くを握り、肘ひじをわずかにまげて刃が上、「柄頭」が腹部中央、「鐙」が約四五度後ろ下がりになるように左親指のつけねを左腰骨の上端に軽く接して刀を携かえる。右手は体側にそって自然に下ろす。

注(1) 柄頭つかがしら 柄の先端 拵こしらえの参照。

(2) 鐙さぶ 鞞さぶの先端 拵こしらえの参照。

## （二）出場

「携刀姿勢」で右足より演武の位置に進み出る。出場前には必ず目釘めくぎをあらため、服装

を正し、刀が帯びやすいよう左帯を調整するなどの諸準備を整えておく。

### (三) 神座への礼

「携刀姿勢」で神座に向かつて直立する。左手を右脇腹わきばら近くにおくり、右手で「栗形」<sup>(1)</sup>の下部を下げ緒とともに握って刃が下、「柄頭」が後ろになるように刀を右手に持ちかえる。左手は鞘からはなして自然に下ろし、右手は「鑑」が前下がりになるように刀を体側にそって自然に提さげる。上体を前に約三〇度傾けてうやうやしく礼を行う。終わって、右手首を左へひねって「たなごころ」<sup>(2)</sup>を右外に向け、そのままへそまえにおくる。左手の親指を鐙にかけて刀を左手に持ちかえ、ふたたび「携刀姿勢」となる。

注(1) 栗形⇨下げ緒を結束する部分⇨拵の図参照。

(2) たなごころ⇨手のひら⇨手の握る部分。

### (四) 演武の方向

「携刀姿勢」のまま右足の方へ回って「神座が左斜めになる方向」<sup>(1)</sup>に位置する。

注(1) この方向を「演武時の正面」という(以下、この方向を方向表記の基準とする)。

### (五) 始めの刀礼

「携刀姿勢」から「1、着座」し、正面床上に柄を右側にして「2、刀を置き」、「3、



正座の姿勢」となったのち、刀への「4、座礼」を行ってふたたび「正座の姿勢」となる。

## 1、着座

「携刀姿勢」から左右いずれの足も引くことなく、両膝ひざをわずかに開きながら折りまげ右手で「袴捌き」<sup>(1)はかまき</sup>を行って左、右の順に「両膝を床につく」<sup>(2)</sup>。両つま先を伸ばして親指をそろえ、腰を下ろして落ち着けながら、右手は指を軽く伸ばして右腿もも上に置くと同時に、左手は刀を持ったままいったん左腿上に置く。

注(1) 袴捌き⇨袴すその裾を「たなごころ」で静かに左右へ払うこと。

(2) 両膝を床についたとき、両膝の間隔はおよそひとこぶしとする。この時、「鑑」が床に当たらないように刀を水平近くにする。

## 2、刀の置き方

左手で左腿上の刀をわずかに右前に引き出しながら右手を左手の内側におくり、右手の親指を鐙にかけて残りの四指で鯉口近くを握る。刃を正面に向けて右肘を伸ばしながら、左手は鞘をしごくようにして「鑑」近くにおくって上から軽く握る。上体を前に傾け、「鑑」が神座に向かないようにやや手前に引いて刀を正面床上に横たえる。上体を起こしながら両手を右、左の順に腿上に置き、気を静めて「正座の姿勢」となる。

### 3、正座の姿勢

背筋<sup>せすじ</sup>を伸ばして「丹田<sup>①たんでん</sup>」に力をこめ、両肩の力を抜いて胸は自然に張る。「うなじ<sup>②</sup>」を伸ばして頭<sup>かしら</sup>をまっすぐにし、両手を自然に腿上に置く。目は約四〜五メートル先の床面上に向け、半眼に開いて「遠山<sup>③えんざん</sup>の目付け<sup>めつけ</sup>」となり、気は四方にくぼる。

注① 丹田⇨へその下⇨下腹。

② うなじ⇨首の後ろ側。

③ 遠山の目付け⇨目の前を注視しないで遠くの山を見る気持の目付け。

### 4、座礼

「正座の姿勢」から上体を前に傾けながら、指をそろえて両手を左、右の順に床につき、両人さし指と親指の先をたがいに合わせて三角形をつくる。両肘を軽く膝と床につけて上体を低く倒して額<sup>ぬか</sup>ずき、うやうやしく礼を行う。終わって上体を静かに起こしながら、両手を右、左の順に腿上にもどしてふたたび「正座の姿勢」となる。

### (六) 帯刀

「始めの刀礼」を終え、剣心一体の心境となった「正座の姿勢」から上体を前に傾けながら両手を伸ばして刀をとる。右手は「たなごころ」を上にして鯉口近くを握って鐔に

親指をかけると同時に左手を「鑑」近くにおくって鞘を上から軽く握る。上体を起こしながら「鑑」を腹部中央におくって左手でわけた帯の間に入れる。左手を左帯におくり、右手で鐙がへそまえにくるように「刀を帯びる」<sup>(1)</sup>。終わって、下げ緒を結び、両手を腿上に置いて帯刀した「正座の姿勢」となる。

注(1) 刀を帯びてから刀を前後に動かし、柄を回すなどのことは努めて避ける。

## (七) 終わりの刀礼

演武を終え、「着座」したのち「1、脱刀」し、正面床上に柄が左側になるように「2、刀を置いて刀への座礼」を行う。左腿上に「3、刀をとり」、「4、立ちあがる」とともに「携刀姿勢」となる。

### 1、脱刀

帯刀した「正座の姿勢」から下げ緒をとき、左手は鯉口近くにおくって親指を鐙にかけて握り、刀をわずか右前に引き出しながら右手は左手の内側におくる。右手の人さし指を鐙にかけて残りの四指で鯉口近くを握る。左手を左帯におくり、右肘を伸ばして刃が内側に向くように脱刀する。

### 2、刀の置き方と座礼

左手は左腰に当てたまま、右手は「鑑」を右膝右前方におくって刀の刃を内側に向けていったん刀を床上に立てたのち、刀を静かに左に倒して正面床上に一文字に横たえる。上体を起こしながら両手を腿上に置いて「正座の姿勢」となる。「(五)の4、座礼」にならって刀への礼を行ったのち、両手を腿上にもどしてふたたび「正座の姿勢」となる。

### 3、刀のとり方

左手は左腿上においたまま、右手を伸ばして、人さし指を鐔にかけて残りの四指で鯉口近くを握る。刃を内側に向けたままいったん刀を静かに正面中央に立てる。左手を鞘の中程におくり、「鑑」近くまで下ろす。両手で刀を左脇後方へ引いて左腿上に置く。左手を鞘からはなして、右手の内側におくる。左手の親指を鐔にかけ、残りの四指で鯉口近くを握って刀を左手に持ちかえ、右手は右腿上に置く。

### 4、立ち上がり方

刀を左腿上に置いた「正座の姿勢」から腰を上げ、両つま先を立てて腰を伸ばす。右足を左膝頭の内側におくり、上体を前に傾けることなく立ち上がると同時に後ろ足を前足にそろえて「携刀姿勢」となる。

(八) 退場

「携刀姿勢」で神座に向き直り、刀を右手に持ちかえて「神座への礼」を行う。ふたたび左手に持ちかえて「携刀姿勢」となり、左足から二、三步後退し、右足の方へ右回りに回って退場する。

## 二、術技

〔正座の部〕

(一) 一本目「前」<sup>まえ</sup>

〔要義〕

対座している敵の殺気を感じ、機先を制して「こめかみ」<sup>(1)</sup>に抜きつけ、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

注(1) こめかみ＝目と耳の線付近。

〔動作〕

1、正面に向って正座する。静かに刀に両手をかけて鯉口を切り、腰を上げながら刃を上にしたまま「鞘引き」<sup>(1)</sup>ととともに刀を抜き出し、両つま先を立てて鞘を左へかえし始め、

「鞘放れ」<sup>(2)</sup>寸前に刃を水平にし、腰を伸ばして右足を「踏み込む」<sup>(3)</sup>と同時に敵の「こめかみ」<sup>(4)</sup>めがけて激しく「抜きつける」。

注(1) 鞘引き⇨左手は鯉口からはなすことなく、小指を帯に押しつけて左こぶしをじゅうぶんに後方に引くこと。

(2) 鞘放れ⇨切っ先が鞘の鯉口から放れること。

(3) 踏み込んだとき、左足のつま先は左膝の真後ろとなって両膝が直角となるようにじゅうぶんに腰を入れ、上体をまっすぐにして「丹田」に力を入れる。

(4) 抜きつけたとき、上体は約四五度左へ開き、右こぶしは右斜め前方で止める。切っ先は右肩よりわずかに下げ、右こぶしよりやや内側で止める。

2、左膝頭<sup>ひざがしら</sup>を右かかと近くにおけると同時に鯉口をへそまえにもどしながら切っ先を左耳にそって後ろを突く気持ちですばやく刀を頭上に「振りかぶる」<sup>(1)</sup>。振りかぶると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく右足を踏み込むと同時に真つ向から「切り下ろす」<sup>(2)</sup>。

注(1) 振りかぶったとき、切っ先を水平より下げない。

(2) 切り下ろしたとき、左こぶしはへそまえで止め、切っ先を水平よりわずかに下げると。体勢は「前項の注(3)」と同様である。

3、左手を柄からはなして左帯におくると同時に右手の「たなごころ」を上にかえして刃先を左に向け、そのまま右へおおきく肩の高さに回して肘をまげてこぶしを「こめかみ」に近づける。立ち上がりながら「袈裟(1)に振り下ろしての血振り」をして「居合腰(2)」となる。

注(1) 袈裟に振り下ろしての血振りは雨傘あまがさの雫しずくを振りきるときと同じ要領で行う。振り下ろしたとき、右こぶしは左手と水平の高さで右斜め前方となり、切っ先は約四五度前下がりとなって右こぶしよりやや内側で止める。このとき刃先は振り下ろした方向に向く。

(2) 居合腰ざんしん＝残心の気構えで両膝をわずかにまげ、腰をおとした姿勢。

4、「居合腰」のまま後ろ足を前足にそろえ、続いて右足を引く。左手を左帯から鯉口におくって「納刀(1)」し、納め終わると同時に後ろ膝を床につく。

注(1) 納刀のとき、左手は鯉口を中指で握って親指と人さし指の握りをゆるめ、右手は鰐元近くの棟むねを左手の親指とまげた人さし指のくぼみにおくる。右肘を右斜め前方に伸ばして切っ先を左腰近くにおくるとともに、左手の鯉口も左帯近くにおくって切っ先を鯉口に入れる。刀を納めはじめるとともに左手で鞘をわずかに引き出してこれを迎え、

静かに両手で納め終わって鏢に左手親指をかける。納め終わったとき、鏢はへそまえとし、刀はほぼ水平にする。

5、立ちあがると同時に後ろ足を前足にそろえる。右手を柄からはなして「帯刀姿勢」<sup>(1)</sup>となり、左足より退いて元の位置にもどる。

注(1) 帯刀姿勢Ⅱ刀を帯に差した姿勢。

## (二) 二本目「後ろ」<sup>うしろ</sup>

〔要義〕

背後にすわっている敵の殺気を感じ、機先を制して「こめかみ」に抜きつけ、さらに向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

正面から右足の方へ右回りに回って後ろ向きに正座する。静かに刀に両手をかけ、「一本目、動作の1」にならって刀を抜き出す。刀を抜き出しながら右膝頭を軸に左膝を立てて左回りに回って正面の敵に向き直り、同時に左足をやや左寄りに踏み込んで敵の「こめかみ」めがけて激しく抜きつける。



以下「一本目、動作2、3、4」と同様に足の運びを左右逆にして「切り下ろし」、「血振り」、「納刀」し、「帯刀姿勢」となって左足より退いて元の位置にもどる。

### (三) 三本目「受け流し」

〔要義〕

左横にすわっていた敵が、突然、立って切り下ろしてくるのを「鎬」<sup>(1)しのかき</sup>で受け流し、さらに袈裟に切り下ろして勝つ。

注(1) 鎬Ⅱ刀身の図参照。

〔動作〕

1、正面から右向きに正座する。正面（左横）の敵に振り向くと同時に両手をすばやく刀にかける。間をおくことなく、腰を上げて右足つま先を立て、腰を伸ばしながら左足を右膝の内側に足先をやや外側に向けて踏み込んで刀を胸元近く頭上前方に抜き上げると同時に立ちあがり、右足を左足の内側に踏み込んで敵の打ち下ろした刀を受け流す。

注(1) 刀を抜き上げたとき、刃先は後ろ斜め上に向けて切っ先を下げ、刀で上体をかばった

姿勢となる。

2、受け流した勢いで切っ先を右上方へ回して敵に向き直りながら左手を柄にかけ、刀を止めることなく左足を右足後方に引くと同時に敵の左肩口から、「袈裟に切り下ろす」<sup>(1)</sup>。

注(1) 袈裟に切り下ろしたとき、左こぶしはへそまえて止め、切っ先は水平よりわずかに下げ、やや左となる。

3、そのままの姿勢で刃先を前方に向けながら「両手を左前」<sup>(1)</sup>にして「ものうち」<sup>(2)</sup>近くを右膝頭の上方におくる。

注(1) 両手を左前にしたとき、左手は肘を伸ばして柄を上から握り、右手は「たなごころ」を上に向け、握りをゆるめて柄を下から支える姿勢となる。

(2) ものうち＝刀身の図参照。

4、右手を柄からいったんはなし、上から逆手に持ちかえる。<sup>さかて</sup>

5、左手は柄からはなして鯉口を握る。右手は「たなごころ」を上にかえして切っ先を下から左へ回して鰐元近くの棟を鯉口におくる。逆手のまま「納刀」し、納め終わると同時に後ろ膝を床につく。

6、立ちあがると同時に後ろ足を前足にそろえる。右手を柄からはなして「帯刀姿勢」

となり、左足より退いて元の位置にもどる。

〔居合膝の部〕

(四) 四本目「柄当<sup>つかあ</sup>て」

〔要義〕

前後にすわっている二人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の「水月」<sup>(1)</sup>に「柄頭」を当て、続いて後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに正面の敵を真つ向から切り下ろして勝つ。

注(1) 水月みづげつ みづおち。

〔動作〕

1、正面に向って「居合膝」<sup>(1)</sup>で着座する。すばやく刀に両手をかけて腰を上げ、左足のつま先を左膝の真後ろに立てて腰を伸ばし、右足を踏み込むと同時に、両手で鞘もろとも刀を前に突き出して「柄頭」で正面の敵の「水月」に激しく当てる。

注(1) 居合膝は次の要領で着座する。「帯刀姿勢」から「袴捌き」ののち、「両膝を折りまげて左膝を床につき、右足を左膝の内側におくって左つま先を伸ばす。右足は膝を斜めに傾けて立てて足裏右の方で床を踏み、尻を左かかとのせて上体を落ち着ける。両手

は「たなごころ」を下に向けて軽く握り、両腿の中程に置いて「作法、五の3」「正座の姿勢」にならって正しい姿勢となる。

2、直ちに左手で鞘だけ後方に引きながら後ろの敵に振り向き、左膝頭を軸に左足のつま先を右に回して上体を左に開いて抜き放つと同時に「ものうち」近くの棟を左乳に当てて刃を外側にする。間をおくことなく、左手を内側にしほって鯉口をへそまえにおくと同時に右肘を伸ばして後ろの敵の「水月」を突き刺す。

3、正面の敵に振り向き、左膝を軸に左足先を元にもどすと同時に刀を引き抜きながら頭上に振りかぶり、左手を柄にかけて正面の敵に向き直ると同時に真つ向から「切り下ろす」。

注(1) 切り下ろしたとき、切っ先や体勢は「一本目、動作2の注(2)」と同様である。

4、そのままの姿勢で、左手は柄からはなして左帯におくと同時に右手の刀は「右に開いての血振り」をする。

注(1) 右に開いての血振りをしたとき、右こぶしの位置は右斜め前方にあって、その高さは左手と水平にする。刃先は右に向け、切っ先はわずかに下げ、右こぶしよりやや内側で止める。

5、左手を左帯から鯉口におくって「納刀」しながら前足を後ろ足に引きつけて腰を落ち着け、片膝ついた蹲踞すんきょの姿勢となる。

6、腰を伸ばし、右足を踏み出して立ち上がると同時に後ろ足を前足にそろえる。右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

〔立ち居合の部〕

(五) 五本目「袈裟けさぎ切り」

〔要義〕

前進中、前から敵が刀を振りかぶって切りかかろうとするのを逆袈裟に切り上げ、さらにかえす刀で袈裟に切り下ろして勝つ。

〔動作〕

1、右足より正面に向かつて前進し、左足を踏み出したときにすばやく刀に両手をかける。鞘を左下にかえしながら刀を抜き出し、右足を踏み込むと同時に右片手で正面の敵の右脇腹から逆袈裟(1)に「切り上げる」。

注(1) 切り上げたとき、刀をかえして右のこぶしは右肩の上方となる。

2、そのままの足踏みで左手は鞘を元にもどしながら鯉口からはなして柄にかけ、切り上げた刀を止めることなく敵の左肩口から袈裟に「切り下ろす」。

注(1) 切り下ろしたとき、左こぶしと切っ先の位置は「三本目、動作2の注(1)」と同様である。

3、右足を引きながら八相はっそうの構えとなつて残心を示す。

4、左足を引きながら左手を柄からはなして鯉口を握ると同時に「袈裟に振り下ろしての血振り」をする。

5、そのままの姿勢で「納刀」する。

6、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

## (六) 六本目「諸手突き」

〔要義〕

前進中、前後三人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の右斜め面に抜き打ちし、さらに諸手で「水月」を突き刺す。つぎに後ろの敵を真っ向から切り下ろす。続いて正面からくる

他の敵を真つ向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

- 1、右足より正面に向かつて前進し、左足を踏み出したときに刀に両手をかけ、右足を踏み込むと同時に上体を左へ開いて正面の敵の右斜め面からあごまで抜き打ちする。
  - 2、直ちに後ろ足を前足近くにおくりながら刀を中段に下ろして左手を柄にかけ、間をおくことなく右足を踏み込むと同時に諸手で正面の敵の「水月」を突き刺す。
  - 3、後ろの敵に振り向き、右足を軸に左回りに回って刀を引き抜きながら左足を左に踏みかえ、受け流しに頭上に振りかぶり、後ろの敵に向き直ると同時に右足を踏み込んで真つ向から「切り下ろす」<sup>(1)</sup>。
- 注(1) 切り下ろしたとき、両こぶしはへそまえで止め、刀は水平にする。以下、十二本目まで真つ向から「切り下ろす」場合はすべて同様である。
- 4、さらに正面からくる他の敵に向き直ると同時に左足を左に踏みかえ右足を踏み込んで真つ向から切り下ろす。
  - 5、そのままの姿勢で左手を左帯におくると同時に「右に開いての血振り」をする。
  - 6、左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で「納刀」する。

7、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

(七) 七本目「三方切り」

〔要義〕

前進中、正面と左右三方の敵の殺気を感じ、まず右の敵の頭上に抜き打ちし、つぎに左の敵を真つ向から切り下ろし、続いて正面の敵を真つ向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

1、右足より正面に向かって前進し、左足を踏み出したときに刀に両手をかける。正面の敵を押しながら刀を抜き出し、右の敵に左足を軸にして向き直ると同時に右足をやや前方に踏み込んで敵の頭上からあごまで抜き打ちする。

2、そのままの足踏みで右足を軸にして左の敵に向き直りながら刀を受け流しに頭上に振りかぶると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく真つ向から切り下ろす。

3、左足を軸にして正面の敵に向き直りながら刀を受け流しに振りかぶり、右足を踏み込むと同時に真つ向から切り下ろす。



- 4、右足を引きながら諸手左上段の構えとなつて残心を示す。
- 5、左足を引きながら左手を柄からはなして左帯におくると同時に「袈裟に振り下ろしての血振り」をする。
- 6、左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で「納刀」する。
- 7、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

(八) 八本目「顔面<sup>がめん</sup>当て」

〔要義〕

前進中、前後二人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の顔面に「柄当て」し、続いて後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに正面の敵を真つ向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

- 1、右足より正面に向かつて前進し、左足を踏み出したときに刀に両手をかける。右足を踏み込むと同時に鞘もろとも突き出して「柄頭」を敵の両眼の間に激しく当てる。
- 2、直ちに後ろの敵に振り向きながら「鞘引き」をする。右足を軸に左回りに回つて

「鞘放れ」と同時に左足を左に踏みかえ、後ろの敵に向き直ると同時に右こぶしを右上腰に当てる。刃を外側にして刀を水平にする。間をおくことなく、右足を踏み込むと同時に上体を崩さずに右肘をじゅうぶん伸ばして後ろの敵の「水月」を「突き刺す」。

注(1) 突き刺したとき、右こぶしは切っ先よりわずかに下げる。

3、正面の敵に振り向き、刀を引き抜きながら右足を軸に左回りに回って左足を左に踏みかえ、受け流しに振りかぶり、左手を柄にかけると同時に正面の敵に向き直り、間をおくことなく右足を踏み込んで正面の敵を真っ向から切り下ろす。

4、そのままの姿勢で左手を柄からはなして左帯におくと同時に「右に開いての血振り」をする。

5、左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で「納刀」する。

6、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

## (九) 九本目「添え手突き」

〔要義〕

前進中、左の敵の殺気を感じ、機先を制して右袈裟に抜き打ちし、さらに腹部を添え手で突き刺して勝つ。

〔動作〕

1、右足より正面に向かって前進し、左足を踏み出したとき、左の敵に振り向くと同時に刀に両手をかける。続いて踏み出した右足を軸にして敵に向き直りながら左足を引くと同時に上体を左に開いて敵の右肩口から左脇腹まで「袈裟に抜き打ちする」<sup>(1)</sup>。

注(1) 袈裟に抜き打ちしたとき、右こぶしはへその高さで止め、切っ先は右こぶしよりわずかに上がったところで止める。

2、右足をやや外側に向けてわずかに引いて「添え手突きの構え」<sup>(1)</sup>となり、間をおくことなく左足を踏み込むと同時に敵の腹部を「突き刺す」<sup>(2)</sup>。

注(1) 添え手突きの構え⇨左手は刀身の中程の棟を親指と人さし指の間でしっかりはさみ、柄を持つ右手は右上腰にあて、刃先を下に向けて刀を水平にし、上体を右に開いた姿勢。

(2) 突き刺したとき、右こぶしはへそまで止め、刀は水平にする。

3、左手の位置を動かすことなく、刀を引き抜きながら刃先を前下に向け、右こぶしを右乳前方におくって「構え」<sup>(1)</sup>、残心を示す。

注(1) 構えたとき、左手は親指と人さし指の間に刀身をはさんだまま「たなごころ」を下に

向け、右腕は軽く伸ばして刀との角度はおおむね直角にする。

4、左手を刀身からはなして鯉口を握り、左足を引くと同時に刃先の向きにそって「右に開いての血振り」をする。

5、そのままの姿勢で「納刀」する。

6、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

## (十) 十本目「四方切り」

〔要義〕

前進中、四方の敵の殺気を感じ、機先を制してまず刀を抜こうとする右斜め前の敵の右こぶしに「柄当て」し、つぎに左斜め後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに右斜め前の敵、続いて右斜め後ろの敵、そして左斜め前の敵をそれぞれ真っ向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

1、右足より正面に向かって前進し、左足を踏み出したとき、右斜め前の敵に振り向くと

同時に刀に両手をかける。鞘ごと突き出して、刀を抜こうとした敵の右こぶしを右足を踏み込むと同時に強く柄の平ひらで打つ。

2、直ちに左手で「鞘引き」しながら左斜め後ろの敵に振り向き、切っ先が鯉口から放れると同時に、左回りに回って敵に対し「二重身」<sup>(1)</sup>となり、「ものうち」<sup>(2)</sup>付近の「棟を左乳に当てる」。間をおくことなく左足を踏み込むと同時に左手を内側にしぼりながら右肘を伸ばして敵の「水月」を突き刺す。

注(1) 一重身⇨半身よりも上体が開き、ほぼ真横に向いた状態。

(2) 棟を左乳に当てたときおよび突き刺したときの上体は「四本目、柄当て」のときと同様である。

3、右斜め前の敵に振り向き、刀を引き抜きながら頭上に振りかぶると同時に左手を柄にかけ、右足を軸に右回りに回って敵に向き直ると同時に左足を踏み込んで真つ向から切り下ろす。

4、右斜め後ろの敵に振り向きながら左足を軸にして受け流しに振りかぶり、敵に向き直ると同時に右足を踏み込んで真つ向から切り下ろす。

5、後ろ（左斜め前）の敵に振り向きながら右足を軸にして左回りに回り、左足を左に踏

みかえて脇構えになりながら受け流しに振りかぶり、右足を踏み込むと同時に左斜め前の敵を真つ向から切り下ろす。

6、右足を引きながら諸手左上段の構えとなつて残心を示す。

7、左足を引きながら左手を柄からはなして左帯におくると同時に「袈裟に振り下ろしての血振り」をする。

8、左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で「納刀」する。

9、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

## (十) 十一本目「総切り」

〔要義〕

前進中、前方の敵の殺気を感じ、機先を制してまず敵の左斜め面を、つぎに右肩を、さらに左胸を切り下ろし、続いて腰腹部を水平に切り、そして真つ向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

1、右足より正面に向かって前進し、左足を踏み出したときに刀に両手をかける。右足

を踏み出して刀を前方に抜き出し、右足を左足近くに引きよせながら受け流しに頭上に振りかぶると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく右足を前に踏み込んで正面の敵の左斜め面からあごまで切り下ろす。

2、切り下ろした刀を棟の方向に返して頭上に振りかぶり、右足を前に踏み込んで正面の敵の右肩口から「水月」まで切り下ろす。

3、切り下ろした刀を棟の方向に返して頭上に振りかぶり、右足を前に踏み込んで正面の敵の左脇下から「へそまで切り下ろす」<sup>(1)</sup>。

注(1) へそまで切り下ろしたとき、刀は水平にする。

4、切り下ろした刀を棟の方向に返して頭上に振りかぶり、刃先の方向を前方に返しながら左上腰に刀を水平にし、刀を止めることなく右足を前に踏み込んで正面の敵の右腰腹部から左腰腹部を水平に切る。

5、水平に切った刀を止めることなく頭上に振りかぶり、右足を前に踏み込んで正面の敵を真つ向から切り下ろす。

6、そのままの姿勢で左手を左帯におくると同時に「右に開いての血振り」をする。

7、左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で「納刀」する。

8、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、左足より退いて元の位置にもどる。

(三) 十二本目「抜き打ち」

〔要義〕

相対して直立している前方の敵が、突然、切りかかってくるのを、刀を抜き上げながら退いて敵の刀に空を切らせ、さらに真つ向から切り下ろして勝つ。

〔動作〕

1、直立したまますばやく刀に両手をかけ、左足を後方に引き、右足を左足近くに引きよせながら刀をすばやく頭上に抜き上げると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく右足を踏み込むと同時に真つ向から切り下ろす。

2、右足を左足の後方に引きながら左手を左帯におくと同時に「右に開いての血振り」をする。

3、左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で「納刀」する。

4、後ろ足を前足にそろえ、右手を柄からはなして「帯刀姿勢」となり、右足より前に



出て元の位置にもどる。

### 三、補足

#### (一) 神殿内での出場・退場における足の運び方・回り方

神殿内で演武する場合、出場するときは「下の足」<sup>(1)しも</sup>から進み、退場するときは「上の足」<sup>(2)かみ</sup>から退く。方向をかえるときは「上の足」の方へ回る。

注(1) 下の足 〓 「神座」または「上座」<sup>かみざ</sup>から遠い方の足、正中線上に位置したときは左足。

(2) 上の足 〓 「神座」または「上座」に近い方の足、正中線上に位置したときは右足。

#### (二) 神殿内における神座への礼

「携刀姿勢」で神座に向かい、「作法、(五)の1」にならって「着座」する。左手で左腿上の刀をわずかに右前に出しながら右手を左手の内側におくる。右手の人さし指を鐙にかけ、残りの四指で下げ緒とともに鯉口近くを握り、刀を右手に持ちかえる。左手を左腿上に置きながら右手は「鑑」を左後方から右後方におくり、刃は内側にして鐙を膝頭にそろえ、右腿と平行におよそひとこぶし離して静かに床上に置く。右手を刀からはなして右腿上にもどし、「作法、(五)の4」にならって「座礼」を行う。終わって、逆の順序で左腿上に刀

をもどす。

### (三) 相互の座礼

(二)の「神殿内における神座への礼」と同様であるが、恩師ならびに先輩に対しては先に額ずき、おくれて上体を起こす。

### (四) 野外での刀礼

「携刀姿勢」より左手をわずかに右前に引き出しながら右手を左手の内側におくる。右手の親指を鐙にかけ、残りの四指で下げ緒とともに鯉口近くを握る。刃を外側に向けて右肘を右前に伸ばしながら左手は「たなごころ」を上に向けて「鑑」近くにおくる。両手で刀を目の高さにいただき、刀に対してうやうやしく礼を行う。「始めの刀礼」のときは続いて「鑑」を腹部中央におくって「帯刀」し、「終わりの刀礼」のときは刀を左脇後方へおくって「携刀姿勢」となる。

### (五) 提げ刀姿勢

左手は下げ緒とともに刃を上にして鯉口を軽く握り、体側にそって「鑑」が後ろ下がりになるよう刀を自然に提げて立った姿勢。「休め」のとき、この姿勢をとる。

(六) 演武の心得

演武はすべて、充実した氣勢、正確な刀法、適法な姿勢、いわゆる「氣・劍・体の一致」を心がけ、全身全霊を打ち込んで真劍勝負の心境で「行ずる」心がけが大切である。

(七) 呼吸

各技に移るときは原則として三呼吸目を吸い込んだときに動作を始める。各技を一呼吸で終えることが望ましいが、さもなくば敵に呼吸を悟られないようにすることが大切である。

(八) 柄の握り方

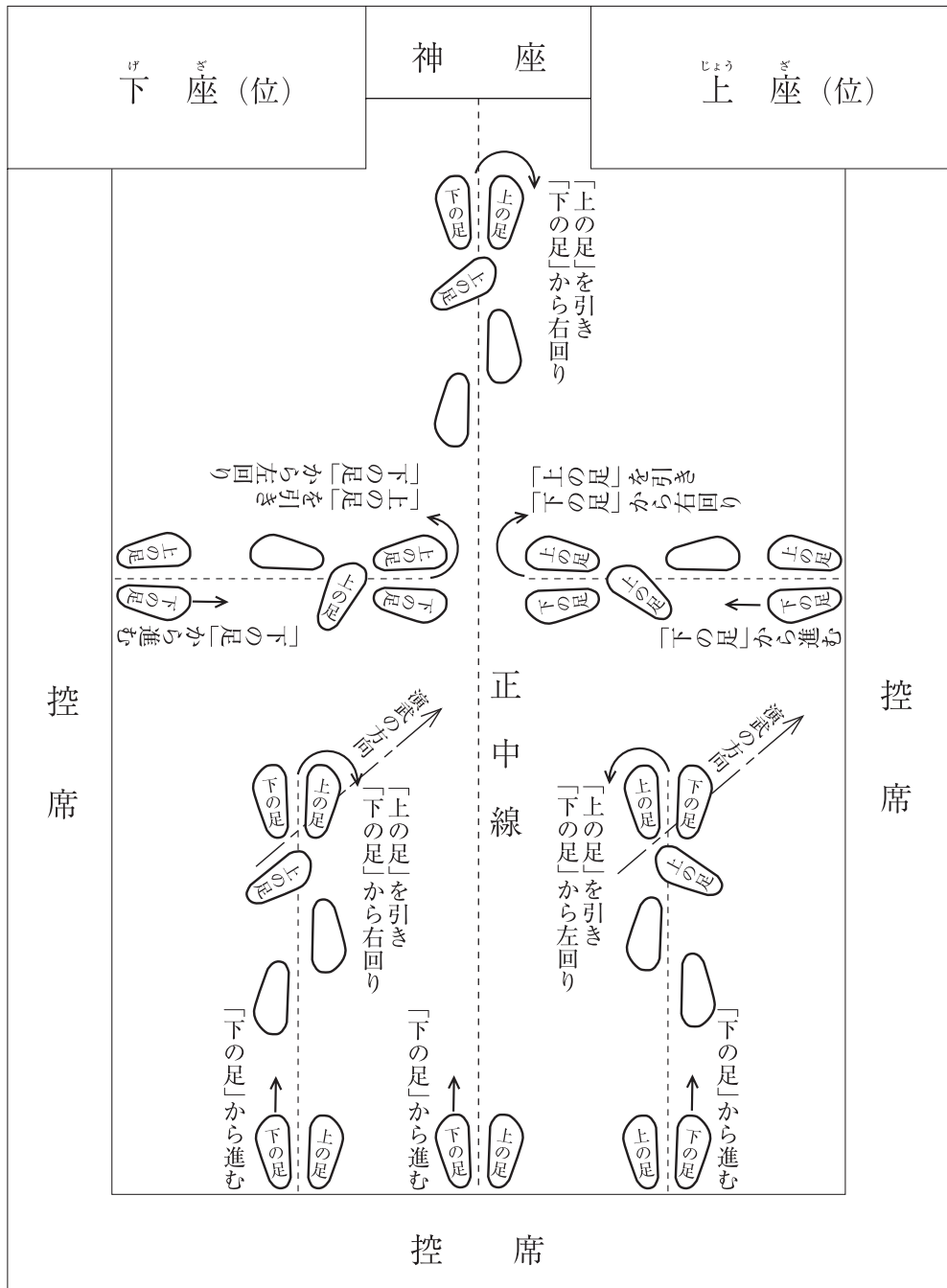
右手は鐔元近くを握り、左手は「巻き止め」<sup>(1)</sup>に小指がかからぬように「柄頭」を余して握る。両腕とも上筋より下筋を強くし、小指と薬指を締めて他の指をゆるめ、ちようど鶏卵を握るように柄に「たなごころ」が全部さわっているよう、柔らかく握る。

注(1) 巻き止め＝拵の図参照。

(九) 下げ緒

刀には下げ緒を結束するのが原則である。下げ緒の結束法および捌き方は、各流派の定める方法により行う。ただし場合によっては着用を省略することもできる。

# 神殿内での出場・退場における足の運び方・回り方(図解)



全日本剣道連盟居合審判・審査上の着眼点 財団法人 全日本剣道連盟

作法（礼法）

一本目

（前）

① ……………定められた作法（礼法）の通り行っているか。  
抜きつけのとき、充分に鞘引きをしているか。

② 左の耳にそって、後ろを突く気持ちで振りかぶっているか。  
振りかぶった切っ先は、水平より下がっていないか。

③ 間を置くことなく切り下ろしているか。

④ 切り下ろした切っ先は、わずかに下がっているか。

⑤ 血振りの体勢は正しいか。

⑥ 正しく納刀しているか。

二本目  
（後ろ）

① 刀を抜きながら向き直ると同時に、左足をやや左寄りに踏み込んで  
か。

② 敵のこめかみに正しく抜きつけているか。

③ 受け流しの体勢にて、上体をかばった姿勢になっているか。

④ 左足を右足後方に引き、袈裟切りになっているか。

⑤ 左こぶしはへそまえで止め、切っ先がわずかに下がっているか。

⑥ 柄頭が敵の水月に確実に当たっているか。

⑦ 後ろの敵に対し、左手は鯉口を握ったまま、しぼり込むようにへそまえ  
におくり、右肘を伸ばして突いているか。

⑧ 前の敵に対しては、刀を引き抜きながら頭上に振りかぶり、真っ向から  
切り下ろしているか。

四本目  
（柄当て）

① ……………定められた作法（礼法）の通り行っているか。  
抜きつけのとき、充分に鞘引きをしているか。

② 左の耳にそって、後ろを突く気持ちで振りかぶっているか。  
振りかぶった切っ先は、水平より下がっていないか。

③ 間を置くことなく切り下ろしているか。

④ 切り下ろした切っ先は、わずかに下がっているか。

⑤ 血振りの体勢は正しいか。

二本目  
（後ろ）

① 刀を抜きながら向き直ると同時に、左足をやや左寄りに踏み込んで  
か。

② 敵のこめかみに正しく抜きつけているか。

③ 受け流しの体勢にて、上体をかばった姿勢になっているか。

④ 左足を右足後方に引き、袈裟切りになっているか。

⑤ 左こぶしはへそまえで止め、切っ先がわずかに下がっているか。

⑥ 柄頭が敵の水月に確実に当たっているか。

⑦ 後ろの敵に対し、左手は鯉口を握ったまま、しぼり込むようにへそまえ  
におくり、右肘を伸ばして突いているか。

⑧ 前の敵に対しては、刀を引き抜きながら頭上に振りかぶり、真っ向から  
切り下ろしているか。

五本目

(袈裟切り)

① 逆袈裟に切り上げたとき、刀をかえした右こぶしは右肩の上方になっているか。

② 左足を引きながら左手が鯉口を握ると同時に刀を袈裟に血振りをしていくか。

六本目

(諸手突き)

① 敵の右斜め面を抜き打ちしたとき、あごまで切り下ろしているか。

② 中段になりながら後ろ足を前足に送り込んで確実に水月を突き刺しているか。

七本目

(三方切り)

① 右の敵に抜き打ちしたとき、あごまで切り下ろしているか。

② 左の敵に向き直り、間をおくことなく真つ向から切り下ろしているか。

③ 受け流しに振りかぶり、切り下ろした刀は水平になっているか。

八本目

(顔面当て)

① 柄頭で両眼の間を正しく突いているか。

② 後ろの敵に対し右こぶしを正しく右上腰にとっているか。

③ 後ろの敵に完全に向き、かかとをわずかに上げて突いているか。

④ かぎ足で突いていないか。

九本目

(添え手突き)

① 右袈裟に抜き打ちしたとき、右こぶしはへその高さとなり、切っ先は右こぶしよりわずかに上がっているか。

② 左手が刀身の中程を親指と人さし指の間で確実にささみ、右こぶしは右腰に当てているか。

③ 腹部を突き刺したとき、右こぶしはへそまえて止まっているか。

④ 残心のとき、右肘が曲がったり、右こぶしが右乳より高くなったりしていないか。

十本目

(四方切り)

- ① 柄当てのとき、強く確実に柄の平で打っているか。  
② 鞘引きしたとき、物打付近の棟を左乳に当て水月を確実に突き刺しているか。

- ③ 突いたとき、左手は鯉口を握ったままへそまえにおくり、左右のしほり込みができているか。

十一本目

(総切り)

- ① 脇構えを取ってからではなく、脇構えになりながら振りかぶっているか。  
② 刀を抜き上げたとき、受け流しに振りかぶっているか。  
③ 切るとき、送り足になっているか。

十二本目

(抜き打ち)

- ① 腰腹部を切るとき、刃筋正しく水平に切っているか。  
② 刀を抜き上げたとき、左足を十分に後方に引いているか。  
③ 刀を抜き上げたときの、右手の位置は正中線になっているか。

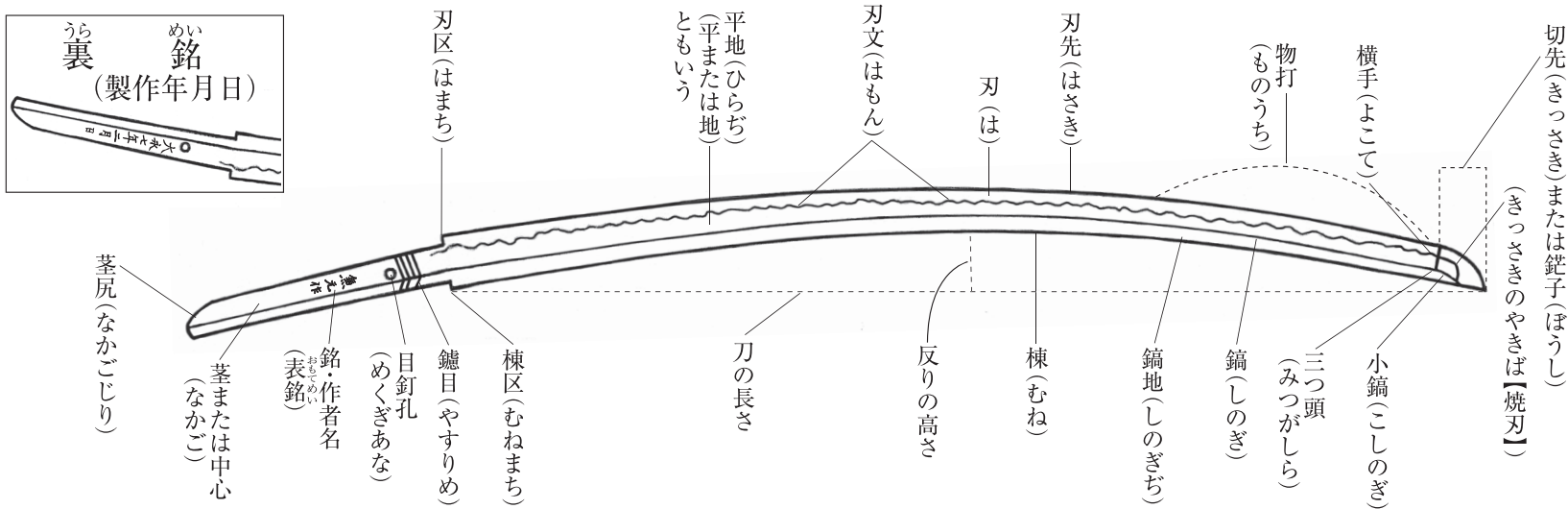
昭和六十三年九月十七日

※平成十二年十一月二日、十一本目・十二本目追加

# 日本刀および拵の各部名称

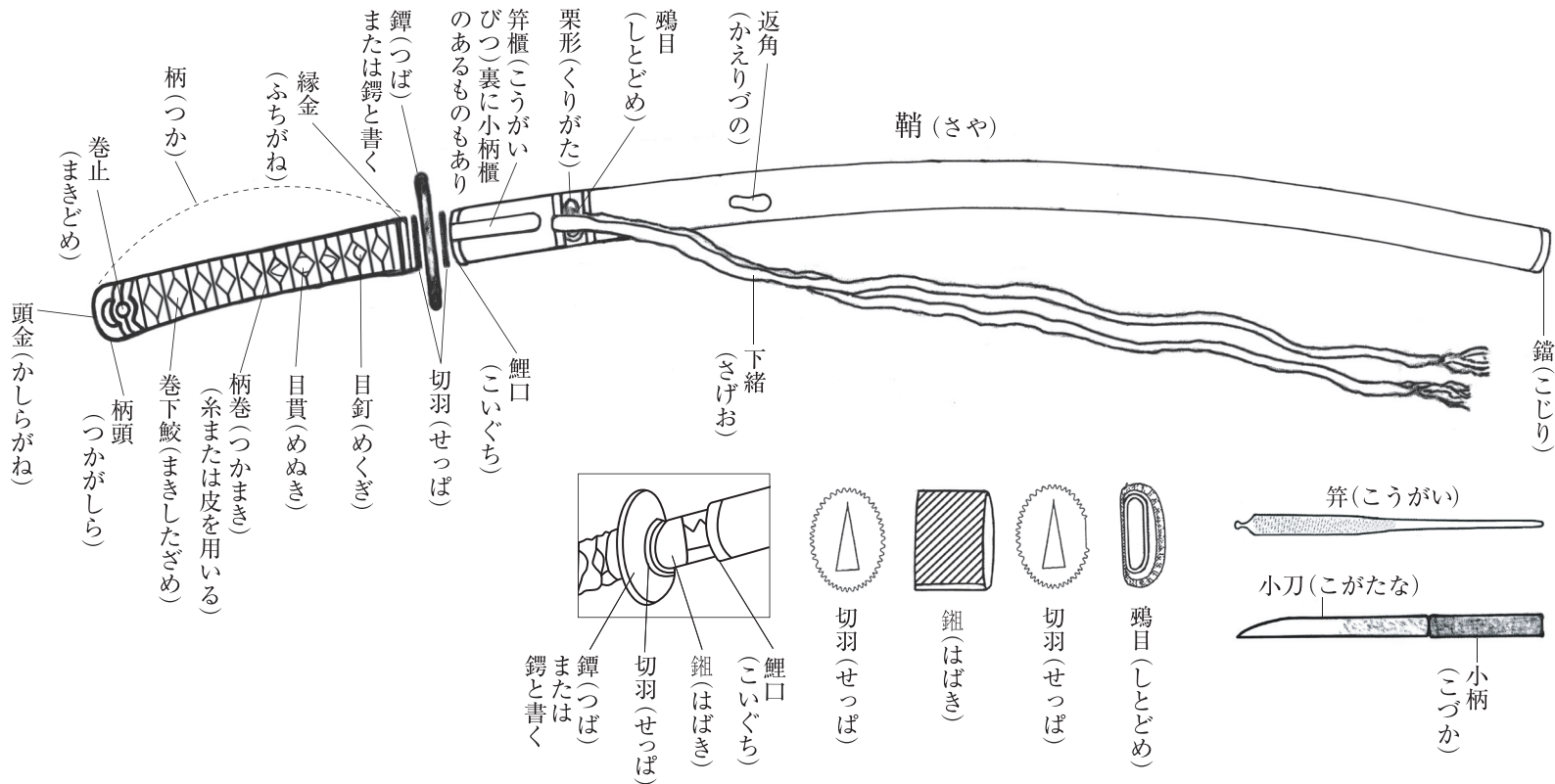
## 刀身 (打刀)

うちかたな



## 拵 (打刀拵)

うちかたなこしらえ





## 追記 一

一 昭和四十四年五月制定

### 〔制定小委員会〕

委員長 政岡壱実

委員 山蔦重吉・紙本栄一・檀崎友彰・沢山収蔵・額田 長

### 〔制定委員〕

武藤秀三・吉沢一喜・政岡壱実・山本晴介・山蔦重吉・紙本栄一

檀崎友彰・大村唯次・額田 長・沢山収蔵

### 〔居合道研究委員会〕

委員長 政岡壱実

委員 細間清志・橋本正武・檀崎友彰・山蔦重吉・森原一二・額田 長

金谷為吉・紙本栄一・山本晴介・沢山収蔵・環 量

## 追記 二

一 昭和五十一年十二月六日一部改正、同日施行

〔居合道委員会〕

委員長 紙本栄一

委員 伊沢善作・沢山収蔵・環 量・檀崎友彰・妻木正麟・中島五郎蔵

額田 長・橋本正武・細間清志・三谷義里

追記 三

一 昭和五十五年三月二十一日現行の七本に三本追加、同年四月一日施行

〔居合道委員会〕

委員長 紙本栄一

委員 沢山収蔵・環 量・檀崎友彰・妻木正麟・額田 長・橋本正武

細間清志・三谷義里・和田八郎・相楽芳三

追記 四

一 昭和六十三年九月十七日改正、同年十一月一日施行

〔特別委員〕

紙本栄一・檀崎友彰・環 量

〔居合道委員会〕

委員長 棚谷昌美

委員 中島五郎藏・国広金熊・山口礼市・大野幸雄・富ヶ原富義

澤田友信・佐川博男・富岡 巖・佐藤 毅

## 追記 五

一 平成十二年十一月二日現行の十本に二本追加、平成十三年四月一日施行

〔居合道委員会〕

委員長 児嶋 克

委員 池田晃雄・上野貞紀・河村好雄・岸本千尋

福田一男・藤田 正・藤田光明

幹事 小倉 昇

## 追記 六

一 平成十八年三月十四日一部修正、同年四月一日施行

〔居合道委員会〕

委員長 上野貞紀

委員 河口俊彦・岸本千尋・武田清房・安永 毅

山崎 誉・山崎正博

幹事 小倉 昇

